



ビジョンを示すこと 周りの人を巻き込むこと

田口理穂*ドイツのエコあれこれ

No. 1



1月に日独エネルギー変革評議会(GJETC)というワークショップに参加した。同評議会は、気候変動対策に向けた日独連帯プロジェクトであり、互いのエネルギー市場から学び合おうというもの。

一般向けのワークショップには、シェーナウ電力会社のウルズラ・スラーデクさんや会津電力の佐藤彌右衛門さん、環境エネルギー政策研究所(isep)の飯田哲也さんをはじめ、環境省や経済産業省とその関連団体からも参加した。

この会議を聴講して思ったのは、日本とドイツではずいぶん認識が違うということ。しばしば、話がかみ合わないくらいに。ドイツからの出席者は脱原発は当然で、今後どのように再生可能エネルギーを伸ばしていくかを焦点としているのに、市民電力関係以外の日本人はお金の話ばかりしている。「安いから再生可能エネルギーを目指すのか」という質問が出たときはびっくりした。電力市場が自由化しても電気代が今と変わらないから電力会社を替えなかった、という人もいた。

「日本はドイツのように陸続きでないから、よその国に余った電力を送ったり、足りない分を買えないから、難しい」と、状況の違いばかりを強調し

て、再生可能エネルギー推進は困難との立場だ。お金を中心に、物事が回っている。

一方、福島原発の事故をきっかけに、自分たちの手に電力を取り戻そうとしている人たちがいる。

前述の佐藤さんは避難区域への住民帰還政策について「国に言いたい、住民が戻れるような政策をしてほしい。使えない土地だからソーラーパネルを置いてやるよ、と大手会社がくる。植民地型で、地元の人たちは奪われ続けている。地域のアイデンティティが失われる。どうやって戦えばいいのか」と訴えると、ソーラーコンプレックスのミュラーさんは「土地を提供したい人、お金を持っていて土地を使いたい人に別の道を示すこと、つまり市民参加のプロジェクトを提示すること」と答え、「土地は汚染されているというスティグマ(負の烙印)があるから、農業よりエネルギーの方がいい。それも地元の金を使ってやるのがいい。コミュニケーション、各人が自分の強みを生かすこと」と強調した。

スラーデクさんは「農家の人が太陽光発電装置を屋根につけるのは、子孫

のためであり、みなのためであり、かつお金のためでもある。安定した収入源だからだ。それが気候保護につながっている」と話す。

スラーデクさんは「うちは、客を使ってメッセージを広めてきた。ニュースレターを出しているが、エネルギー転換はモチベーションによるところが大きい。いかに多くの人を巻き込むか。みなでやるんだ、と信じて続ける。あきらめない」と話した。また、「エネルギーシステムを変えるのだというビジョンを示すことが大事」と発言した人もいた。

多くの人に関心を持ってもらい、いかに巻き込んでいくか。これがエネルギーシフトの鍵だと思った。これはどのような市民運動にも当てはまる。ごみかんさんの活動もそうですね。あきらめずに続けること。解決策に向かって、一歩一歩みんなで近づけるよう願っている。

ごみかんドイツ特派員 田口理穂

AKIRA の 成長記録



明は小学4年生。先生から「性教育の授業をするので、子どもが家庭でそれに関連する質問をするかもしれません」と、お便りがありました。しばらくして明は「ママは、まだ赤ちゃん産めるんだよねー」と言いました。月経について説明したことがあるので、それについて習ったなと思いました。そのうち「10歳でも子どもできるんだよねー」と言います。「10歳はちょっと早いんじゃないの?」と言ったら、「いや、ナタン(クラスの男の子)はできる!」と断言。「どうして」ときくと、ちょっと考えてから「ナタンは進化したから」。

明とはいつも日本語で話しており、この会話も日本語でしたが、この場合「進化」は不適切。しかし「進化したってどういう意味」といくら聞いても、はっきり答えません。言いたくないのか、言葉が見つからないのか。なぜ明はまだ進化してなくて、ナタンは進化したのか、理由を知りたいのだけど。また、6年生の娘を持つママ友によると「バレンタインデーに先生が女生徒に、バラとコンドームを配ってた!」とのこと。16歳でたばこビールが解禁となるドイツ。大人になる準備は、着々と進められているようです。